

て一番鎗を合、敵三人迄鎧付申。鎧下より敵飛出、拙者甲被切破、山城守侍共手をくだけ候。渡邊大學・田中八右衛門・高澤猪右衛門・堀口重兵衛のぼり指一人、已上五人山城守者共、一所に討死仕様子の儀は、加藤石見殿御覽被成、安彦左馬殿も御覽可被成。とあり。三州志に、横山山城家士木村權兵衛・伴太左衛門、此二人於堀田圖書丸槍功あり。賞譽各白銀二枚・帷子二つ・單物一つを賜ふ。伴は今山城與力伴左一兵衛の祖也。といへり。

○横山氏家士今井才右衛門傳

元和二年武功書に云ふ。二百石今井才右衛門。柴田宮内殿家中に在之時、柴田殿越前権の谷へ被働跡に一揆起り、北庄城へ攻入、堀に手を懸乘候處、大窪忠左衛門・宇野丹助・我等三人一所に有之、堀へ着候者屏際迄追落、忠左衛門致手柄、丹助はそこにて鎧手負、我等も忠左衛門同前に働候様に、忠左衛門存知候。其後丹羽越前守殿に在之、寄親寺西次郎兵衛に而有之候。越中へ太閤様御馬出候時、木船に而寺西陣へ夜討を入、手負・死人四十二人有之。夜中之儀にて何も陣所を逃候處、侍七人出合、彼夜打を追拂。

我等も七人之内にて有之。右之仕合齋藤亦兵衛と申仁、于今北庄に奉行被申候。御家中には長門殿内笠井誠人存知被申候。肥前守様宇野平八御扶持被成に付、我等も越前より呼下、平八寄子之内に而御奉公申上。然處關東八王寺城御攻被成處、一番之丸多門へ、宇野平八印次郎兵衛一番乘を被仕に付、我等も供致し、三人一所に有之、矢簾を切落候處に、三人共鎧手を負候。其働水野内匠・同次郎左衛門被存知、神尾圖書も御存知にて御座候。其後森山岩淵に而噴嘩有之時、是も次郎左衛門・内匠殿被存知候。其後山城守へ出、于今奉公仕。大聖寺御攻被成時、鐘丸に而廣瀬民部堀際に、太田將監同前に乘候。其より山城守に付、本城之門脇まで參候處、蘆葺之櫓を山城守燒候刻斷中、其より本城へ參り高名仕。とあり。右森山岩淵噴嘩の事は、三壺記に巨細に見ゆ。文祿元年四月十四日の事也。此の時利家・利長兩卿御相談之上にて、宇野平八儀は切腹可仕旨被仰出、於大徳寺切腹すとありて、今井才右衛門は此の後横山の家士と成りたるもの也。

○横山氏家士辰巳隼人傳

元和二年武功書に云ふ。四百石辰巳隼人。山城守所に在之、大聖寺御攻被成時、鐘の丸堀際にて石弓に被打落といへども、重て堀を乗り、二の丸へ着、一番に乘入、本丸にて高名仕。其以後山城守吟味被仕、知行加増被申付。其後鐵炮之者二拾人被預、大膳に可致奉公旨被申付。去年於大坂岡山表大膳鎧下之高名被致刻、我等も跡に付、則突合、敵突隊、我等も被突、亦矢疵共に二ヶ所手を負、其後首二つ討取。御歸陣以後今度大坂にて骨を折候由、大膳より判金被與候。先年於越中富山、傍置脇部彌八郎と申者之若黨と申事出來之處、我等彌八郎と一所に有之故、同道仕、彼場に懸合候へば、家之内に人多取籠居候に付、裏へ廻り候處、無人と見懸切て出、散々之仕合手を負候へども、相手之腕打落候故、無致方彼者川岸へ飛入候を、共に飛入川中にて切留、又次之者參り働候處を、是も川中へ切落し、拙者も五ヶ所手を負候。右之脇部彌八郎・瀧川傳兵衛と申者、餘多手を爲負、其身も深手を負、其夜兩人共に相果候。右之仕合各御存知被成。とあり。横山家士櫻井朝香曰く、辰巳隼人、大坂夏陣に高名致すに付、銀二枚・帷子二つ賞譽として

賜はりたり。此の事三州志に記載せず。辰巳隼人が子孫、本家は後出奔斷絶す。庶家は今與力辰巳兵之進暨び藩士辰巳清大夫是也。といへり。

○横山氏家士竹田金右衛門傳

元和二年武功書に云ふ。三百石竹田金右衛門。大聖寺城御攻被成刻、隼人にて、清水新右衛門と同道致し、御陣に罷在高名仕。其後山田八右衛門所に在之刻、木之新保町に成敗者取籠居候を、各被仕處へ、我等も罷越、御馬廻之山口次郎左衛門殿之子息と我等内へ入候て、彼者之首を拙者討はなし、刀を打折候。右之様子八右衛門承り候て、刀一腰被與候。其後八右衛門家來川村甚助と申者を、山田嘉右衛門と我等兩人に被申付候處、拙者一人仕成敗仕候。右之仕合共八右衛門具に聞届、加増百石被申付候。去々年安房守所に有之、大坂表にて極月四日に手を負候。様子之儀、安房守殿内青木頼母存知候。去年於大坂岡山表大膳鎧下之高名被致刻、我等も跡に付、則突合、鎧手三ヶ所負、其後首一つ討取候。御歸陣被成、今度於大坂骨折申由に而、大膳より判金被與候。とあり。横山家士櫻井朝香曰く、三州志

より判金被與候。とあり。横山家士櫻井朝香曰く、三州志